

## 〈論 説〉

# オーストラリアにおける第三齢代の 自己学習に関する心理学的研究

宮 原 英 種

### 高齢社会の到来

1996年、総務庁が発表した高齢者に関する統計調査によると、1996年現在で高齢者の推計人口は、1899万人で、総人口に占める割合は、15.1%である。国連の定義によると、高齢化社会とは、65歳以上の高齢者が全人口の7%を越えたときである。その割合が14%を越えると、「化」がとれて高齢社会となる。1970年には7%であったわが国の老齢人口は、年々その比率を高め、1990年には12.1%となり、昨年、その比率が14%を突破し、国連でいう「高齢社会」になったのである。このままの推移で進めば、わが国の高齢者の人口の割合は、2010年には21.3%に達し、全人口に占める高齢者の比率は主要国ではトップになり、2020年には、全人口の4人に1人が高齢者となると推定されている。

しかし、人口の高齢化は、なにも日本だけではない。国連や厚生省の推計では、諸外国の高齢者人口の割合は、94年～95年の推計でスウェーデンで17.5%、イタリア、16.4%、イギリス、15.7%などとなっており、現在においては、全人口に対するその比率は日本を凌駕している。

さらに、高齢社会のかかえる問題は、高齢者が全人口に占める比率の増大だけではない。高齢者の絶対数の急激な増大である。1988年、イギリスのケンブリッジでおこなわれた「21世紀へ」と題する「第1回国際U3A（第三齢代の大学）シンポジウム」(Futerman, 1988)において、21世紀における高齢人口の絶対数についての統計的予測がおこなわれている。それによると、中国やインド、旧ソビエト連邦、アメリカ合衆国が、高齢者の絶対数においてもっと

も大きな高齢者人口をかかえることになることと予測され、そのあと、日本、ブラジル、インドネシア、パキスタン、メキシコ、バングラディシュ、ナイジェリアへと続くことが報告されている。しかも、その絶対数の増大は、急激におこなわれる。ちなみに、これらの主な国の60歳以上の人口を1975年と2025年で比較すると、その増加は、3倍から6倍に達するものとなる。

	1975年	2025年
中国	7,400万から	28,400万へ
インド	3,000万	14,600万
旧ソ連	3,400万	7,100万
アメリカ合衆国	3,100万	6,700万
日本	1,300万	3,300万
ブラジル	600万	3,200万
パキスタン	300万	1,800万
メキシコ	300万	1,800万

さらに、長寿社会は、高齢者の全人口に占める比率の増大や、絶対数の増加だけではない。80歳以上の超高齢者人口の増大が急速におこなわれるということである。たとえば、2025年までには、80歳以上の超高齢者は、中国では2,500万人、インドで1,000万人、アメリカ合衆国で760万人、イギリスにおいても200万人に達することが予測されている。介護や手助けを必要とするような年齢の高齢者が急速に増大するということである。

これら的高齢社会においては、これまでの社会にないさまざまな問題を提起する。高齢者の暮らしや生活、年金の支給、そのための税制改革、介護といった社会・経済的な問題から、その高齢社会をどう生きるかという個人の生き方や適応の問題に至るまで、解決しなければならない問題は多い。とくに、仕事一筋といわれるかたちで生きてきたわが国の高齢者の生き方は、とくに問題をもっているように思われる。

本小論は、オーストラリアにおける高齢者の自己学習を通しての生き方につ

いて若干の考察を加え、わが国のこれからの高齢社会における生き方を考えてみたい。

## 「齢代」の概念

いま、フランスやイギリス、オーストラリアなどの諸外国で、今日の高齢化時代をあらわすことばとして、「第三齢代 (The Third Age)」ということばが注目されている。そのキーになることばが、「齢代 (Age)」ということばである。「齢代」ということばや概念は、まだ日本の学界をはじめ、社会においてもほとんど用いられていない。著者はこの「Age」ということばを「齢代」と訳し、論文では、ここではじめて紹介する。

これまで、人間の一生を区分する方法として、とくにそれを専門とする心理学においては、乳幼児期、児童期、青年期、成人期、老年期といったことばを用いてきた。それは学問的には、決して間違ったことではない。その区分には、それを区分するだけの相当の理由がある。乳幼児期と児童期では、たとえば、その認識の仕方や思考一つとっても、決して同じではない。そこには明らかに、思考形態の違いがみられる。青年期と児童期においても、同じことがいえる。したがって、それらの間の発達上の違いと順次性を明確にした科学的概念としての、これらの発達区分が存在するのである。その意味では、「齢代」という概念は、必ずしも科学的概念ではなく、心理学のなかでもまだ認知されたものではない。しかし、来るべき21世紀の高齢社会における人間の生き方や生活を考えるとき、きわめて实际的で、合理性をもった概念であると考えられる。いやむしろ、これからの長寿社会においては、人生の区分を「齢代」をベースにしておこなうべきであるともいえるのである。

「齢代」は、人間の一生を4つの「齢代」、すなわち、「第一齢代」「第二齢代」「第三齢代」「第四齢代」で区分する。「第一齢代」とは、人間が生まれてから成長するまでの時期である。これまでの発達心理学の区分でいえば、出産から青年期に至る時期である。この時期には、乳幼児期、児童期、青年期がはいっている。心理学がこれまで伝統的にこれまでの時期を乳児期、幼児期、児童期、

青年期等にわけたのは、それなりの意味があったといえる。上に述べたように、思考や認知の違いはもちろん、身体や運動能力の発達、社会性や情動の発達においても、それぞれの時期においては、大きく異なっている。したがって、そこに子どもが発達していく上でのその違いをあらわすための発達区分が生まれるのである。

しかし、人間の長い一生のなかでこの成長のスパンをとらえてみると、乳幼児期、児童期、青年期ともに、きわめて共通したものがある。それは、それらの時期は、その成長の過程におけるある種の違いはあれ、人間がそのあと社会で生きていくための能力の獲得や資質の向上、人格の形成ということにおいてきわめて共通したものがあるということである。まさしく、乳幼児期から青年期に至る時期は、この世に生まれた人間がその社会において生きるための能力や資質を獲得する時期であると考えてよいであろう。このことから、出生から青年期に至るまでの時期を大きく「第一齡代」として区分し、人間が直面する問題や課題、生活の内容、生き方が、来たるべき次の齡代と明確に異なる時期であるということにとらえるのである。

「第二齡代」は「第一齡代」において獲得した能力や資質に基づいて職を得、結婚し、家庭をもち、子どもを育て、男であれば家計を支え、もちろん、女性もそうである場合もあるが、定年を迎えるまでの時期である。おそらく、一生のうちで、もっとも責任をとるやう、成熟した年代である。50歳から60歳ぐらいまでの年代が「第二齡代」といわれるものである。

しかし、人間の平均寿命の伸びとともに、そのあとの依存と介護の時代である「第四齡代」に至るまでに膨大な時間が残されることになった。それまでの社会的責任から解放されたその20年から30年の時間をどう生きるかが「長寿社会」においてはきわめて重要になってきたのである。それが「第三齡代」といわれるものである。

## なぜ「第三齡代」なのか

通常、老齡期にはいった者の呼称として、「高齢者」とか「老人」とかいっ

たことばが使われている。「老人保険」「老人医療」「老人福祉」といったものから、心理学においてもこの時期をあらわすことばとして「高齢期」ということばが使われている。しかし、「老人」という呼称はさることながら、通常使われている「高齢者」ということばも、これからの21世紀を生きる同時代の人たちをあらわすことばとして決して適切であるとは思われない。

その一つの大きな理由は、「高齢」とか「高齢者」ということばのもつイメージが、これからの時代に必ずしも適したものではないということである。心理学に「連想」実験というのがある。実験の対象になる被験者にある刺激語を与えて、最初に頭に浮かんだものを正直に報告させる実験である。この実験を使って大学生およそ80名を対象に「高齢者」ということばを聞いて最初に頭に浮かぶことを紙に書いてもらった。現代の若者、とくに男子の若者が「高齢者」にどんなイメージをもっているかを調べたかったのである。

回答の結果は、多岐にわたっていた。しかし、そのほとんどが、高齢者を「寝たきり」「体が不自由」「病弱・弱々しい」「老人ボケ」といったものから「税金がかかる」「老人ホーム」「介護」、さらには「頑固」「おせっかい」といった性格的な面に至るまで、負のイメージでとらえていた。「人生の熟練者」「人生の先輩」といったポジティブな評価をくださったのは、二人に過ぎなかった。

このような回答をする現代の若者の教育にも問題がないとはいえないが、しかし、「高齢者」ということばそのものに、このような負のイメージをつくり出すなにかがあるのではないかと推定される。あるいは、現代社会のなかで「高齢者」ということばが使われてきた過程のなかで、このような「負のイメージ」をつくり出すものが負荷されていったとも考えられる。「高齢者」ということばの響きやイメージのなかには、人生の役割を終えた、弱々しい、といった明るさのない、ネガティブなイメージがあると思われる。

しかし、成熟した人生の時代を過ぎたとはいえ、この年代にはこの年代の能動的な、それまでの人生とは違った生き方があるはずである。それが「第三齢代」ということばのもつ意味である。一定の仕事を終え、大きな社会的責任から解放されたあとの、それまでの人生とは質的に違った、新しい生き方、それ

が「第三齡代」の生き方のもつ意味である。現代の若者がイメージするような「高齢者」の、どちらかといえば、暗い、弱いイメージではなく、その環境のなかでその年代を積極的に、さらに自分の人生を深め、人生をエンジョイして生きるポジティブな生き方、それが「第三齡代」ということばのもつ意味なのである。

もう一つの理由は、これからの長寿社会においては、「高齢」ということが、他の世代の者と比べて特別のことでなくなってくるということである。これまでの人口比では、「高齢者」の全人口に占める割合は、きわめて低いものであった。いってみれば、加齢の進んだ「高齢者」は、その社会においては、少数派で、特別の存在であったといえる。ごく少数の「高齢者」がいて、他に比率と絶対数においては、それよりはるかに多い、多数派としての成人期のおとなや子どもがいたわけである。高齢者だけを「シルバー」と呼称するような考え方は、この多数派の誰かが考えた特別の概念であったといえる。したがって、「シルバー」以外の他の世代をあらゆる同様のことばが存在しないのである。

しかし、冒頭に述べたデータからもわかるように、「高齢社会」というのは、端的に言えば、高齢者であふれる社会である。「高齢者」が決して特別の存在ではなくなる社会である。現在でも、若者が流出し過疎化の進んだ地域では、全人口の25%あるいは30%が65歳以上の高齢者であるということも決して少なくない。そのことからすれば、単に加齢し、年をとったということだけで、他と特別に区別する概念は、その意味を喪失していくと考えられる。

さらに重要なことは、これからの長寿社会においては、成熟した「第二齡代」を過ぎたとはいえ、「第三齡代」にはいつてからも、上に述べたように、さらにいかにその長い人生を健康で、エンジョイしながら積極的に生きていくかということが重要になってくる。それを意味するのが、「第三齡代」のもつ概念である。これらのことから、人間の一生を区分する概念としての「齡代」こそ、区分の連続性と同意性において、きわめて合理性と実際性をもつものであると考えられる。

## 第三齢代における適応の問題

その第三齢代には、生活や健康をはじめとして、さまざまな問題が存在する。しかし、そのなかで一つの重要な問題は、その第三齢代をどう生きるか、すなわち、適応の問題である。

第三齢代にはいったときに、最初に起こる適応の問題は、第三齢代への移行、すなわち、退職時に直面する適応の問題である。ケンブリッジでおこなわれたシンポジウム、「第三齢代の生活」において、第三齢代への移行、すなわち、退職時に直面する適応の問題がとりあげられた。それによると、退職時にみられる男女の適応の違いも論議され、女子が男子に比べてはるかにその状況に対応するのがすぐれていることが報告されている。とくに退職と同時に多くのものを失う、エクゼクティブな地位にある者にとっては、退職後の適応はきわめて厳しいものである。グループとして的人間的な交流、同僚と友人、仕事へのチャレンジ、組織のなかでの役割と地位、それらのすべてが失われたとき、その世界はまことに荒寥たるものとなり、退職後の生活を再構築することがいかに難しいかが報告された。ある者は、最初は、ベッドに寝るとき「なんと幸せか。朝、起きる必要はないんだ」と考えた。それから数週間すると、「起きなければならないのか。起きてなにがあるのだ」へとになっていく。そして最後には、「わたしが起きたかどうか、だれかが気遣ってくれる者がいるのか」へと変わっていった。おそらく、この問題は、日本のエクゼクティブにとっても、同じ問題として、あるいは、もっと深刻な問題として存在するであろう。

第二の問題は、第三齢代において、どのように生き生きと、明るく、能動的に、はりのある生活を送るかということである。しかし、今日まで、それを示唆するような発達心理学の知見や発達心理学からの提言は、まったく存在しない。高齢者についての身体的、精神的なデータは、これまでの発達心理学が示すデータにみられるように、そのほとんどすべてが停滞と衰退のデータである。老齢期における身体的な変化として、髪が白く薄くなる、皮膚にたるみが生じ、つやがなくなる、歯が抜け、表情の精気さは喪失し、活力のある行動が減退し、視力や聴力の衰えも顕著である、といった、いわゆる、身体的老化についての

データの羅列である。精神的な面においても、関係を知覚し認識する能力、抽象的な概念を形成する能力、一貫して推理する能力、記憶等において衰退が生じるなど、さまざまな領域で衰退と停滞が起こることがあげられている。

しかし、一方、最近のごく一部の研究のように、創造性やある種の思考については、青年期に比べて、第三齢代に属する者がすぐれているという結果も得られている。高山ら（1996）は、東京都内の老人大学の受講生106名（男子51名、女子55名、平均年齢73.4歳）と都内の三つの大学生147名（男子38名、女子109名）を対象に、創造性テストを用いて両者の思考の創造性について比較している。それによると、第三齢代になっても、創造的思考は衰えることはなく、概して、第三齢代の方が青年期の大学生に比べて創造性得点が高いことが示されている。とくに、経験や知識に関連する思考や、非凡な考えや無駄のない考えを生み出す思考の独自さは、青年に比較してすぐれたものである。

しかし、いずれにせよ、「高齢社会」といわれる今日の社会においても、学問的にも、社会的通念においても、能動的で、元気はつらつとして、知的で、好奇心に満ちた70歳の人間を受容するような概念は、まったく存在しないといってよい。筆者は共同執筆者とともに、これまで心理学があげてきたデータを越えた、生きる希望としての発達心理学書「発達心理学を愉しむ」（宮原、宮原、1996）を執筆した。それが成功しているかどうかは、読者の判断を待たなければならないが、これからの発達心理学は、第三齢代の者が生きる希望としての社会的適応を重視した「発達心理学」の出現を期待したいものである。これまでの多くの発達心理学書は、高齢ゆえに、身体的、知的、情緒的、社会的能力の衰退と停滞を述べてきた。その心理学的なデータは決して間違ったものではなかろう。しかし、その停滞と衰退のなかにあっても、第三齢代の者の生きる力と生きる希望は、それまでの齢代に比しても、さらに強いはずである。第三齢代にはいつの身体的、精神的停滞と衰退のなかで、この齢代の者が身体的健康を維持し、精神的な柔軟さを保つための挑戦にどう向かっていくかが重要な課題としてとりあげられなければならない。その挑戦の一つが、「第三齢代の大学」である。



## 第三齢代の大学 (U 3 A)

第三齢代を生き生きとして生きる一つのモデルが「第三齢代の大学 (University of The Third Age, U 3 A)」である。第三齢代の大学の概念とモデルは、1972年、フランスで生まれたものである。その目的は、高齢者が学問に直接ふれることで知的生活の質を向上させることであった。しかし、フランスではじめられたときのU 3 Aは、第三齢代に属する高齢者を対象に、講義、研究旅行、文化活動等を大学のスタッフが計画し、大学の施設を使って実施するかたちでおこなわれ、学習の企画、立案、実施は、すべて大学がおこなったのである。その後、1981年、フランスではじまったU 3 Aの概念と運動は、ケンブリッジ大学のグループによってイギリスに伝えられた。しかし、イギリスのケンブリッジで創設されたケンブリッジU 3 A (U 3 A C)においては、フランスのモデルとは異なり、学習活動を大学から切り離し、第三齢代の会員の自助と相互扶助の考えが取り入れられたのである。U 3 A Cにおいては、そのメンバーは、学習者として参加するだけでなく、その組織を成功させるための、さまざまな計画、立案、運営、教授の義務がもとめられたのである。その後、イギリスU 3 Aは、第三齢代の会員で組織をつくり、学習計画を立案し、運営するというシステムがとられたのである。

この自助と相互扶助で組織を運営するケンブリッジU 3 Aのモデルは、1984年、オーストラリアのメルボルンにはいつてきた。メルボルンに設立されたオーストラリアU 3 Aは、その後、またたく間に、U 3 Aのキャンパス、あるいは、その支部をオーストラリア全土に拡大していったのである。1995年には、オーストラリア全土で、109のU 3 Aがつくられ、メンバーの数は、およそ、24,000名である。このようなオーストラリアU 3 Aに参加している高齢者の数と支部の増大は、第三齢代に対する認識がオーストラリアにおける高齢者の間にアピールしたものであることを示すものと考えてよいであろう。

オーストラリアのU 3 Aは、ケンブリッジU 3 Aの伝統を受け継ぎ、メンバーから選出された無報酬の委員会によって運営されている。学習する内容も、ギ

リシャ史からコンピュータ、有機栽培、ホビー、スポーツに至るまで、それぞれの領域で興味をもち、経験をもった者が、教師としてのボランティア活動によっておこなわれている。オーストラリアU3Aでは、大学の支援を得て活動しているところもあるが、しかし、活動の基本は、そのU3Aの地域社会に基づいた自助の精神であることには変わりはない。しかも、大学からの支援を受け入れているキャンパスも、イギリスとオーストラリアのU3Aの特徴である自立と独立独行の精神は維持されている。わが国においても、これに類似する「老人大学」あるいは「老人大学院」があるが、それらは主として行政が企画・立案し、運営し、高齢の受講者はそれに受動的に参加するかたちである点で、会員が自主的に立案し、運営し、かつその学習に参加する第三齢代の大学、U3Aとは大きく異なるといえる。すなわち、ケンブリッジやオーストラリアでおこなわれているU3Aは、まさしく、自己学習機関なのである。

## ゴールドコーストのU3A

オーストラリア、クインズランド州、ゴールドコーストは、その温暖な気候であるために、オーストラリア全土から第三齢代に属する人が数多く集まってくる。ゴールドコースト市当局の発表によると、50歳以上の高齢者の全人口に占める割合は、38%に達している。ゴールドコーストU3Aは、これらの第三齢代に属する45歳以上の者を対象に、雇用のための資格や技能の獲得というよりも、会員の知識の追求それ自体を目的としてもうけられたものである。現在54の科目が設定され、そのなかから自分の科目を選択し、自分自身の能力と欲求に基づいて学習するようになっている。一年は二つのセメスターにわけられ、会員はそれぞれのセメスターに登録できる。会費は一人の場合、24オーストラリア・ドルである。夫婦で登録する場合、36ドルである。これによって、会員は、学習を完了できると思うすべての科目を受講することができる。試験もないし、宿題もなく、その学習を終了しても資格といったものも与えられない。

U3Aは、それまでにさまざまな人生を歩いてきた者たちの集まりである。したがって、同質の者が集まってつくられた組織ではない。さらに、U3Aは、

自助組織機関である。学生と教師の間の区別もない。U 3 Aの教師の多くは、他のクラスの生徒である。報酬もない。U 3 Aの管理も、オフィス事務も、ボランティアによっておこなわれている。

ゴールドコーストU 3 Aの授業科目は、語学からホビーに至るまで多岐にわたっている。とくにあとで述べるような、日本の「老人大学」の講座と比較した場合、語学関係の講座が多いことが注目される。授業は、主として、月曜から金曜までである。語学は、フランス語、イタリア語、スペイン語、日本語、ドイツ語、ハンガリー語といったものである。しかも、語学は、初級、中級、あるいは、外国語によっては会話までおこなわれる。その他、絵画製作や歴史などの勉強から、トランプ遊び、ピリアードなどのホビー、さらには、テニスやインターナショナル・ダンスに至るまでさまざまな学習活動がおこなわれる。創造的思考、心理学といった科目もある。

U 3 Aの学生は、授業料無料で、ゴールドコースト・キャンパスでおこなわれているグリフィス大学の言語、科学、芸術、工学に至る広範な範囲の講義に出席することができる。

「自助」グループであるので、講座を担当する講師も、さまざまなアカデミックな領域の科目で専門的な知識や技能をもっている者、ホビーやスポーツ、ゲーム、演劇などの才能をもった者が担当するようにし、人材探索をおこなっている。絶えず目と耳を働かせ、歴史、話し方、政治史、地理学、旅行、劇、車の修理、簡単な家の修理、日曜大工、音楽、ダンス、ゴルフなどのコースで講師になる人を探している。こういった領域で自分が興味があり、教えたい科目があれば、それらの人にはいつでも門戸は開放されている。U 3 Aの学習のモットーは、「楽しく学ぶ (learning for pleasure)」である。したがって、U 3 Aの学習では、年齢は障害にはならない。学習に意欲を感じ、自己学習の意欲をもつ者は、いずれの年齢でも学習できる。事実、85歳でコメディをやっている者もいれば、50歳後半の人でタップ・ダンスをおこなっている者もいる。学習への喜びと愉しみは、特定の年齢で止まるものではない。

## 老人大学とU3A

日本においても、高齢者を対象とした学習講座としてその地域の社会教育機関によっておこなわれている「老人大学」「老人大学院」がある。「老人大学」あるいは「老人大学院」——最近では、一部には、老人大学の呼称を改め「シニア大学」と呼んでいるところもあるが——は、その名称がどうであれ、高齢者が社会人として自立し生活をおくるのに必要な日常生活のさまざまな活動を支え、幸せで豊かな生活を送るための一つの試みとしておこなわれているものである。そこで開講されている講座は、「芸術・芸能・趣味」のものから「知識や教養」さらには「健康」といった領域に至るまで広い領域にわたっている。ある調査によると、「芸術・芸能・趣味」に参加している受講者は、講座に積極的に参加し、自らの活動によって創作した作品の上達を把握し、自信や満足感を味わい、さらに、上達への意欲をもって学習することができることが明らかになっている。また「知識や教養」を受講する者も、それによって一般的な常識・教養を養い、社会の変化に対応しようとする気持ちがみられる。「健康や体力」についての講座は、「高齢」ということばに示されているように、この時期の健康に深い関心があるためであると思われる。

日本の老人大学に参加した受講生の感想として「新しい知識や技術の獲得に有意義であった」と感じる者が全体の50%、次の「受講して生活にハリができた」と合わせると、全体の70%が「老人大学」の学習に生きがいを感じていることがわかる。さらに「孤独な老人」といった暗いイメージを払拭する「仲間づくり」に役に立った」「社会的になった」といった学習仲間との仲間づくりにも貢献しているようである。

しかし、日本における老人大学における学習とオーストラリアU3Aの学習の基本的な違いは、日本における老人大学が老人福祉事業の一貫としてその地域の行政主導によっておこなわれるのに対して、イギリスU3Aのモデルを受け継ぐオーストラリアU3Aは、会員自らの総意に基づく自治の精神によっておこなわれるということである。日本の老人大学は、行政が立案・計画し、講

師を探し、受講生は、その企画された講座に出席するというかたちをとる。したがって、原則として、受講料はいらぬ。それに対して、オーストラリアU3Aは、会員が自ら講座の計画、立案をおこない、講座の講師を求め、自らの力と力量で会を運営する。したがって、前に述べたように、講座の講師はボランティアがあたり、報酬はない。会員は、立案された講座に出席するために Semester 毎の受講料を払う。さらに、ゴールドコーストU3Aでは、U3Aの学生は、授業料無料で、ゴールドコースト・キャンパスでおこなわれているグリフィス大学の言語、科学、芸術、工学に至る広範な範囲の講義に出席することができる。このように、オーストラリアU3Aは日本の老人大学と違って、自学自習の精神と大学との連携、あるいは、バックに支えられて活動しているということである。したがって、その講座の内容も、日本の老人大学に比べて、どちらかといえば、よりアカデミックな傾向をもつといえる。

ゴールドコーストU3Aにおいて、236名を対象に質問紙による学習の満足度についての調査がおこなわれている。それによると、83%の者が「非常に、あるいは、まったく満足している」という回答を与えている。「まったく満足していない」と回答した者は全体の2%で、回答しなかった者は、「必ずしも満足していない」ということであると推定されている。これらの結果から、自助学習によるU3Aがそれに参加する会員にかなりの満足度を与えていると考えることができるであろう。

## 結語

いま社会は大きな変革の時代を迎えている。その一つが「高齢社会」の到来である。医学の進歩、食生活の改善、健康への留意、平和な時代の到来など、これらの要因が複合して、これまで地球社会がかつて経験したことのない長寿社会を経験しようとしている。もちろん、わが国もその例外ではない。いやむしろ、わが国は、これまでのどの先進諸国よりも急速な速度で高齢社会へと突き進んできた。それだけに、高齢化にともなう社会的基盤の整備や社会資本の充実の遅れがみられる。高齢社会とは、端的にいえば、人間の寿命が長く伸び

たことである。そのことは、社会的責任から解放されてからの長い人生をどう生きるかということの意味する。そのためには、これからの長寿社会にふさわしい人間の一生を区分する新しい概念が必要である。その新しい概念の一つとして考えられるのが、この小論で提起した「齡代」の概念である。「齡代」という概念は、平均寿命の伸びとともに、一定の仕事を終え、定年を迎えたあとの「第四齡代」に至るまでの20年、あるいは、それ以上の膨大な時間をどう生きるかという、すなわち、「第三齡代」を中心に注目されるようになったものである。われわれは人間の一生を「第一齡代」「第二齡代」「第三齡代」「第四齡代」の4つの齡代でわけることで、齡代間の連続性と同意性を主張することができるのである。

これからの長寿社会においては、その「第三齡代」をどう生きるかが重要な問題となっていく。とくに、その時代をこれまでの「高齢者」ということばのもつイメージではなく、もっと積極的に、生き生きと、自己の人生を深めながら生きていくには、「学習へのよろこび」をもち、絶えず自己を研鑽していくことが大切である。その自己学習への取組みの一つが、オーストラリアU3Aの活動である。

#### 文 献

- Futerman, V. (eds.) 1988 *Into the 21st Century -A Collection of lectures and Seminars from the First International U3A Symposium Cambridge, 1988*, Symposium Committee, University of the 3rd Age in Cambridge.
- Hort, D. & Strickland, C. 1955, *University of the Third Age and Griffith University*, Report for Griffith University Quality Assurance Round 1955
- 宮原和子、宮原英種、1991 日本における「老人大学」に求める高齢者の生きがいについての一考察 近畿大学九州短期大学研究紀要 第21号、29-39
- 宮原英種、宮原和子 1996 発達心理学を愉しむ、ナカニシヤ出版
- 高山 緑、下仲順子、中里克治、石原 治、権藤恭之、1996 老年期の創造性の研究 — 青年群との比較において — 日本心理学会第60回大会論文集